

## 海外の話題

# 賭けるに足る「未来」

農林中央金庫 シンガポール支店長 有我 渉

「うつくしま福島」、父祖の地であり私自身も少年期を過ごしたこの土地が、いま世界中の人々の注目を浴び、語られている……。チェルノブイリやスリーマイル島とともに、原発事故による深刻な放射能汚染を受けた場所「Fukushima」として。

3月11日以降、我々が見たものは、一企業による発電所事故により、基本的な人権とされる健康、生命、財産が、周辺住民においては一瞬にして根こそぎ蹂躪され、農林漁業者においては環境汚染により生活の基盤そのものが失われる、という事態であった。

客観的、冷静に見れば、原発とはもともとそういうリスクを内包しているもの、ということになるのかもしれない。だとするとこの問題は、こうした事態の後でも我々は原発を今後も本当に許容できるレベルのリスクとして考えられるのかどうか、ということになる。

強制的に故郷を追われ避難民となった人々とともに、いま多くの人たちは、原発の安全性を謳いながら管理・監督責任を果たせなかった電力会社と国に対して深い憤りを感じている。と同時に、自ら臍を噛む思いに苛まれているのではないか。仮に「リスクはない、絶対に安全だ」と言われたとしても、我々は「絶対なんてものは有り得ない、世の中何が起こるか分からない」ということを常識的に知っている。だが電力の安定供給＝公益性の高い事業というロジックのもと、万が一への不安を口にできず、不安を先送りしたことで、結果的には専門家や行政官のほぼ言いなりになってしまったことへの後悔、そのあまりにも大きな代償……。

いま我々がなすべきことは、心の底から大切に思うもの、かけがえのないものとは何かを改めて各人が問い、それらが守られ育まれる世の中となるよう各人が声を出し、賭けるに足る未来の実現に向けて一歩踏み出すことではないか。活動期に入ったと思われる地震大国日本で、これからも子々孫々にわたり放射線障害に怯えながら暮らし続けていく道を選ぶのか、それとも歯を喰い縛ってでも原子力以外の代替エネルギーの開発と利用に国民の英知を結集させていく道を選ぶのか……。すべては我々の選択と今後の行動にかかっている。

「ガーデン・シティー・シンガポール」、この緑豊かな島国も1965年の独立後、英国軍の撤退によりGDPの約20%が失われることでその将来が非常に危ぶまれた時期があったことを、建国の父であるリー・クアンユー元首相がその自伝で述懐している。当時の政府は軍の関連施設等の民間転用を積極的に図り、大胆に工業化と産業構造の転換を進めることでこの危機を乗り越えた。彼らの判断がこの国の繁栄の礎になっていることにいま異議を唱える者はいないだろう。だが、世界中で最も劇的かつ急速に産業構造の転換と成長を成し遂げた国といえば、それは他ならぬ日本であった。戦後の平和憲法のもと、広大なすそ野があった軍需産業を棄て、民需に特化した歴史を我々は持っている。人間、腹を決めれば知恵もアイデアも湧いてくる。もし変えるという勇気がなければ、我々は未来の子供たちに夢も希望もつなげず、ただ膨大な負の遺産のみを残した世代として、記憶されることになるだろう。